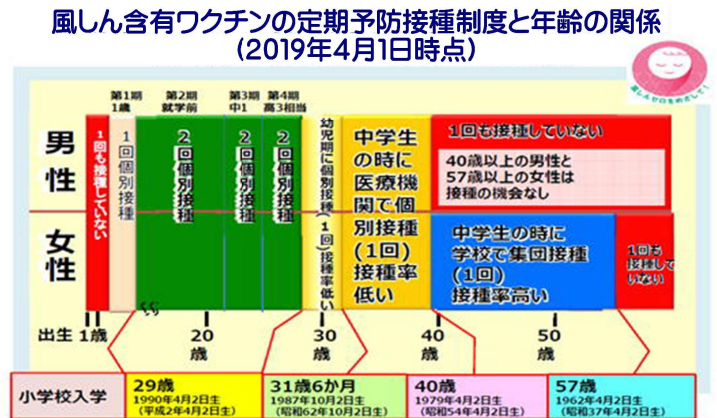
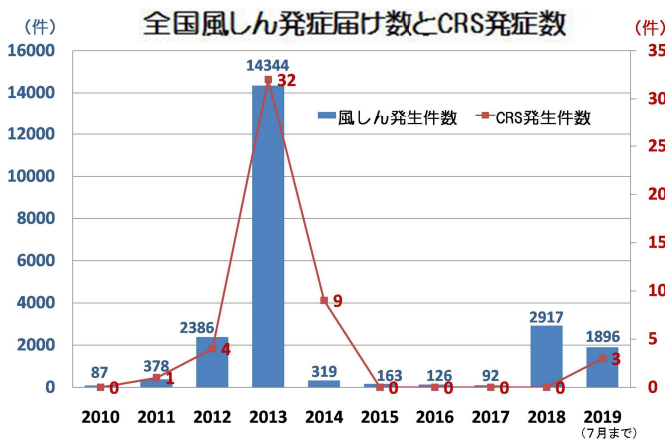




先天性風しん症候群 (Congenital rubella syndrome: CRS) について

妊娠初期の女性が風しんに罹患すると、風しんウィルスがおなかの赤ちゃんに感染して、出生時にCRSと総称される障害を引き起こすことがあります。CRSの**3大症状は難聴・白内障(視力障害)・心奇形**です。軽い心奇形であれば自然治癒しますが、多くは手術が必要となり、完全に治癒することが難しいとされています。母親が顕性(症状がある)感染した妊娠月別のCRSの発生頻度は、妊娠1カ月で50%以上、2カ月で35%、3カ月で18%、4カ月で8%程度で初期ほど発生しやすくなっています。風しんは成人で15%程度不顕性感染があるとされているので、母親が無症状であってもCRSが発生することがあります。

風しんの流行年とCRSの発生の多い年は完全に一致しています(下左グラフ)。



現在風しんに罹患している人の8割は成人男性です。つまり、CRS児のお母さんに風しんをうつした人の8割は男性だと考えられます。風しんは予防接種により根絶可能な病気です。アメリカやカナダではしっかりとした制度の下、ほとんど風しんが発生していないので、CRSは発生していません。しかし、日本では風しんのワクチン接種制度が諸外国より遅れているため、いまだにCRS児が生まれています。今年7月時点ですでに昨年に近い風疹発生件数となり、CRSは3件も報告されています。しかも、ワクチン接種歴が1回あり、HI抗体価が16倍(やや低値)であった母親からもCRS児が生まれています。

風しんワクチンを1回接種していても、抗体価が低い場合はワクチンの追加接種をしておいた方が良いでしょう。2回の接種を完了した母親からのCRS児の出産報告は今のところありません。

日本では2013年に風しんが大流行し、多くのCRS児がうまれました。そのため、国は風しん抗体検査やワクチン接種の助成制度を2014年から開始しています。多くの方にCRSに興味をもって、検査・ワクチン接種を受けていただきたいのですが、風しんワクチンの接種率が低いのはCRSには関係がなさそうな働き盛りの男性が多いため、なかなか難しいのが現状です。最近では会社で検査やワクチン接種を行っている企業もあるのですが、まだまだ一般的ではありません。

そのため、CRSを防ぐには全国的な風しんの流行を止めることよりも、**女性が妊娠前に免疫を付けることが重要です**。現在の定期接種は2回です。ワクチン接種を2回受けていない場合は、検査をし、**抗体価が低ければ是非2回目の接種を受けてください**。

ワクチン接種後2カ月は避妊期間となります。治療ができない焦りを感じる方もいらっしゃるかもしれませんが、その間は障害のない赤ちゃんを産む可能性を高めるのに必要な準備期間だと思ってください。その間にできる検査などもありますので、個人に合わせてご紹介させていただきます。

お知らせ

8月31日(土)、9月21日(土)は医師学会参加のため、休診を予定しています。詳しくは当院ホームページでご確認ください。



<https://www.nagoshi-cl.com/>
<https://www.nagoshi-hi-cl.com/>

